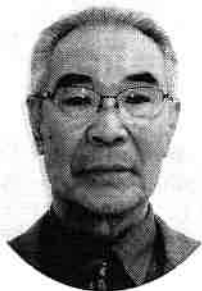


俳人協会 青森県支部

会 報

発行所 俳人協会青森県支部
 〒030-0843
 青森市浜田玉川189の39
 浜田しげる方
 ☎ 017-735-3031



蒲田吟竜 さん

つーが22点を
 獲得、一位と
 なった。吟竜
 さんは「人そ
 れぞれ、様々
 なしがらみや
 しきたりを背

支部俳句大会

一位は蒲田吟竜さん（深浦町）

しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ

支部紙上俳句大会は徳田千鶴子俳人協会理事・「馬酔木」主宰を特別選者に開催、投句数は三百七十六句。支部役員と合わせて二十六人の選者が選句した結果、深浦町の蒲田吟竜さんの句「しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ」が22点を獲得、一位となった。吟竜さんは「人それぞれ、様々なしがらみやしきたりを背

負って生きています。年齢とともに断ち切らねばならぬ事も数多あるが、簡単に断ち切れないものもある。作品に目を止めて下さった先生方に感謝致します。」と喜びを語った。二位は十和田市の中村しおんさんが19点、同じく19点だった八戸市の三野宮照枝さんが三位だった。

徳田千鶴子選天位は

深浦の草野力丸さん

特別選者徳田千鶴子選の天位は草野力丸さんの「山背寒四角にねまる牛の群」だった。

二年度総会は中止

コロナ感染

俳句大会は紙上句会に

俳人協会青森県支部の令和二年度の総会・俳句大会は六月二十一日、青森市の青森国際ホテルで開催予定だったが、新型コロナウイルスの感染被害防止のため総会は中止、俳句大会は紙上俳句大会に変更した。総会の議案については令和元年度事業、決

算報告、二年度の事業計画案・予算案、役員補充案など総会資料を会員に送付、原案通り承認を得た。

役員補充では、今年、俳人協会東北大会・青森大会や本部の「青森吟行案内」刊行のための準備作業に入ることから、体制を強化、郡川宏一、佐々木雅翔、鈴木志美恵、石崎志亥、布施協一の五氏を選任した。また、今年の俳人協会東北大会・青森大会も中止、紙上俳句大会にした。

東北大会も紙上大会に

〔高点句〕

己が影幾たび踏んで田植了ふ 中村しおん
 夏来る子らに走るといふ遊び 三野宮照枝
 仔牛には広過ぎる空牧開き 吉田千嘉子
 バス停に手書きの時刻山若葉 小笠原聖子
 藤咲いて風に量感生まれたり 清水 雪江
 放流の稚魚ひるがへる立夏かな くだどうひろこ
 生国の訛かくさず金魚売 高橋 千恵
 履歴書はもういらぬ歳心太 黒田 長子
 五加摘む会津藩士の小さき墓 岩村多加雄
 万緑や指の先まで深呼吸 下山 延子
 どの牛も祖父の貌なり厩出し くだどうひろこ
 また船に「乗る」と焼酎注ぎ足せり 下河原 勝
 その次の風を選びて花吹雪 野村 英利
 山背寒四角にねまる牛の群 草野 力丸
 滝ひとつ過ぎて轟く次の滝 佐藤 幸子
 鼓笛隊のあとに夏蝶付いてきし 千葉 禮子
 青葉木菟ふた声で突く森の闇 畑中 月穂
 牧草のうねり大きく風五月 鈴木志美恵
 青空はけふも新品花林檎 奥田 卓司
 古釘に父の帽子や遠郭公 牧 ひろし
 吾が子の名忘れし母と蓬餅 伊藤 芳博

四位以下の結果は次の通り。

- ④吉田千嘉子17点⑤小笠原聖子15点⑥清水雪江13点⑦くだどうひろこ12点⑧高橋千恵12点⑨黒田長子11点⑩岩村多加雄11点⑪下山延子11点⑫くだどうひろこ11点⑬下河原勝10点⑭野村英利10点⑮草野力丸9点⑯佐藤幸子9点⑰千葉禮子9点⑱畑中月穂9点⑲鈴木志美恵9点⑳奥田卓司8点

（同点の場合は特別選の得点、選者の天地人、秀逸の数による）

徳田千鶴子 選

天位 山背寒四角にねまる牛の群
 地位 己が影幾たび踏んで田植了ふ
 人位 滝ひとつ過ぎて轟く次の滝
 秀逸 捨舟に投網の乾く若葉光
 岩木嶺のひかりをもらひ剪定す
 姫塚の肩の辺うすき苔の花
 修司忌やガリ版詩集濃き黄ばみ
 仔牛には広過ぎる空牧開き
 しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ
 豆飯やあの畑なく母も亡く
 郭公や鎌研ぐ堰の水の嵩
 田水張る岩木嶺雲を吐きにけり
 透かし見る津軽びいどろ風五月
 小半を手酌に父の日も暮れる
 履歴書はもういらぬ歳心太
 藤咲いて風に量感生まれたり
 春耕の売らねばならぬ畑に佇つ
 父のごとその父のごと耕せり

草野 力丸
 中村しおん
 佐藤 幸子
 中村しおん
 秋谷美智子
 日野口 晃
 下山みのる
 吉田千嘉子
 蒲田 吟竜
 木田多聞天
 和田たかし
 高野万津江
 竹浪 幸子
 成田 政美
 黒田 長子
 清水 雪江
 赤坂 良美
 吉田千嘉子

佳作

木附沢麦青 選

天位 しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ
 地位 今日立夏校歌の山を正面に
 人位 賑やかな鳥語の中の草むしり
 秀逸 陽炎へる鉄路に消えしラストラン
 心のみ畑へ行かせ朝寝せり
 袋掛雲の一つも寄せつけず
 牧草のうねり大きく風五月
 仔牛には広過ぎる空牧開き
 野遊びの歩幅確かに母の杖
 ふらここや漕げば明日が見えるよな
 一歳児の確かな一步雲の峰
 手話習ふ児童生き生き緑さす
 積まれたる石の鎮まる晩夏かな
 藤咲いて風に量感生まれたり
 もの芽に万の声あり天を指す
 勝手口開けてけふより夏暖簾
 鳥帰る空にもありし交差点
 どの木ともなく生まれたる初夏の風

蒲田 吟竜
 橋本 惇子
 工藤 祐子
 蝦名 がこ
 工藤 義人
 千葉 禮子
 鈴木志美恵
 吉田千嘉子
 和田たかし
 蝦名 がこ
 佃 正子
 戸川美重子
 今 順子
 清水 雪江
 市川 明子
 鈴木ゆき子
 田端 千鼓
 七戸富美子

佳作

木村 秋湖 選

天位 その次の風を選びて花吹雪
 地位 花好きの妻の丹精さくら草
 人位 滝ひとつ過ぎて轟く次の滝
 秀逸 しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ
 夏さざす白でまとめる卓上花
 牧草のうねり大きく風五月
 ふるさとの空を称へむ花りんご
 手助けが本気になつて紙風船
 復活の蕪島神社海猫来たる
 たんぼの絮に教はる風の道
 轉にこころの凝りのほぐれゆく
 絵馬掛けにお礼の絵馬も風五月
 肩寄せて母に添ふ窓月涼し
 朴の花高しこぼれてより仰ぐ
 履歴書はもういらぬ歳心太
 放流の稚魚ひるがへる立夏かな
 割箸の杉の香りや夏料理
 仔牛には広過ぎる空牧開き

野村 英利
 土田 紫翠
 佐藤 幸子
 蒲田 吟竜
 江口 みよ
 鈴木志美恵
 浜田しげる
 吉田千嘉子
 布施 協一
 蝦名 がこ
 大川 恵子
 斎藤ひでを
 永倉 みつ
 藤田 豊子
 黒田 長子
 くどうひろこ
 千葉 禮子
 吉田千嘉子

佳作

小野 寿子 選

天位 岩木嶺のひかりをもらひ剪定す
 地位 ふるさとの空を称へむ花りんご
 人位 西日背にうしろ手に曳く猫車
 秀逸 絵馬掛けにお礼の絵馬も風五月
 バス停に手書きの時刻山若葉
 今日立夏校歌の山を正面に
 虹立ちて兄弟げんか止んでをり
 鼓笛隊のあとに夏蝶付いてきし
 杉葉生ふ相伝の畑荒れてをり
 吹き飛ばせコロナ惨禍を春疾風
 吾が子の名忘れし母と蓬餅
 密集は御法度なるぞチューリップ
 国中の自粛の春となりけり
 二〇二〇見る人もなく散る桜
 鶯やコロナ自粛の町しづか
 かたかごの花写す夫ひざまづき
 閉門の続く古城址花は葉に
 春雷を聞きつつ堆肥鋤き込みぬ

秋谷美智子
 浜田しげる
 五十嵐かつ
 斎藤ひでを
 小笠原聖子
 橋本 惇子
 千葉 禮子
 千葉 禮子
 蒲田 吟竜
 南 美智子
 伊藤 芳博
 牧 ひろし
 成田 きみ
 三上 裕子
 檜森 てい
 森下 睦子
 須郷 権太
 宮川 暢子

佳作

土井 三乙 選

天位 父のごとその父のごと耕せり
 地位 また船に「乗る」と焼酎注ぎ足せり
 人位 夏来る子らに走るといふ遊び
 秀逸 新緑や違ふところが伸びる子等
 休み田を充電のごとたんぼば黄
 バス停に手書きの時刻山若葉
 黒蟻の考へてある棒の先
 サンガラス女は女観察す
 豆飯やあの畑なく母も亡く
 古釘に父の帽子や遠郭公
 雨の来る風の匂ひや夕薄暑
 古家や蝦蟇と戸籍を共有す
 虹立ちて兄弟げんか止んでをり
 修司忌やガリ版詩集濃き黄ばみ
 軒下のサツカーシューズ梅雨に入る
 山背寒四角にねまる牛の群
 仔牛には広過ぎる空牧開き
 夏はじめパンケーキよく膨るるよ

吉田千嘉子
 下河原 勝
 三野宮照枝
 大川 恵子
 佃 正子
 小笠原聖子
 郡川 宏一
 くどうひろこ
 木田多聞天
 牧 ひろし
 永倉 みつ
 木村あさ子
 千葉 禮子
 下山みのる
 今 祐治
 草野 力丸
 吉田千嘉子
 小川 澄子

佳作

草野 力丸 選

天位 にんげんに涼しき距離や祈る日々
 地位 伽羅路に風のまつはる麓村
 人位 避妊手術の猫抱き戻る余花あかり
 秀逸 しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ
 復活の蕪島神社海猫来たる
 銀行にアマビエ御座す花の冷
 青空はけふも新品花林檎
 曳かれ行く牛に卵の花腐しかな
 摺鉢の胡麻の匂ひや木の芽和
 密集は御法度なるぞチューリップ
 やむなきのシャッター街や夏に入る
 樹木医の逝く日みどりの日となりし
 藤咲いて風に量感生まれたり
 やませ吹くしかと押しゆく猫車
 菖蒲湯や一病のなき身を浸し
 コロナ禍のシンプルライフ夏に入る
 花好きの妻の丹精さくら草
 岬馬の胴を抜けゆく夏の蝶

大川 恵子
 金田 一子
 榎引 麗子
 蒲田 吟竜
 布施 協一
 桜庭 恵
 奥田 卓司
 木村 幸子
 岩田 秀夫
 牧 ひろし
 永倉 みつ
 雪田 樹理
 清水 雪江
 小野 寿子
 佐々木雅翔
 鈴木 莉花
 土田 紫翠
 畑中とほる

佳作

岩村多加雄 選

天位 虹立ちて兄弟げんか止んでをり
 地位 青葉木菟ふた声で突く森の闇
 人位 サングラス女は女觀察す
 秀逸 透かし見る津軽びいどろ風五月
 夏めくや用件のみの白き箋
 己が影幾たび踏んで田植了ふ
 バス停に手書きの時刻山若葉
 五月憂し音なく充つる採血管
 朧の夜素知らぬ顔で嘘をつく
 郭公や鎌研ぐ堰の水の嵩
 生国の訛かくさず金魚売
 棟上げの木槌高らか青葉風
 また船に「乗る」と焼酎注ぎ足せり
 漕ぐたびに軽くなりたる半仙戯
 惜春や校歌のひとつまた消えて
 やませ吹くしかと押しゆく猫車
 林檎咲く津軽あまねく浮かれをり
 仔牛には広過ぎる空牧開き

千葉 千穂子
 畑中 月穂
 くだうひろこ
 竹浪 幸子
 笹原 郁子
 中村しおん
 小笠原聖子
 土井 三乙
 飯田 知克
 和田たかし
 高橋 千恵
 京谷 みき
 下河原 勝
 清水 雪江
 稲場 暁子
 小野 寿子
 石崎 志亥
 吉田千嘉子

奥田 卓司 選

天位 絵馬掛けにお礼の絵馬も風五月
 地位 自由形次いで背泳ぎ鯉幟
 人位 どの牛も祖父の貌なり厩出し
 秀逸 しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ
 生国の訛かくさず金魚売
 遊歩道のよちよちの児や新樹光
 葉桜となりていささか強き風
 雉の声そろそろ雨の来る頃か
 立春と聞きて腰痛和らぎぬ
 吾が子の名忘れし母と蓬餅
 幼子の立つ足ぢから桃の花
 その次の風を選びて花吹雪
 雨の来る風の匂ひや夕薄暑
 葉桜や参道を行く砂利の音
 バス停に手書きの時刻山若葉
 源泉のまろぶ水音や遠郭公
 鼓笛隊のあとに夏蝶付いてきし
 花冷や勝手手気儘な人とゐて

斎藤ひでを
 小杉 郁子
 くだうひろこ
 蒲田 吟竜
 高橋 千恵
 中村 静江
 西谷 是空
 吉田 敏夫
 飯田 知克
 伊藤 芳博
 若松 一男
 野村 英利
 永倉 みつ
 笹原 郁子
 小笠原聖子
 鈴木志美恵
 千葉 禮子
 木村 秋湖

小野寺和子 選

天位 手助けが本気になつて紙風船
 地位 万緑や指の先まで深呼吸
 人位 野遊びの歩幅確かに母の杖
 秀逸 青葉木菟ふた声で突く森の闇
 履歴書はもういらぬ歳心太
 惜春や校歌のひとつまた消えて
 父が子に手を貸す春の逆上がり
 田水引く歓喜の音の沁みゆけり
 花咲けど太き門大手門
 古釘に父の帽子や遠郭公
 田水張る岩木嶺雲を吐きにけり
 捨舟に投網の乾く若葉光
 クレマチス闇照らしつつ絡み合ふ
 揚ひばり空の階段のぼりゆく
 薫風や正直に生き九十歳
 僧の漕ぐ自転車のかごカーネーション
 どの牛も祖父の貌なり厩出し
 五加摘む会津藩士の小さき墓

吉田千嘉子
 下山 延子
 和田たかし
 畑中 月穂
 黒田 長子
 稲場 暁子
 浜田しげる
 鈴木 莉花
 杉山 畝女
 牧 ひろし
 高野万津江
 中村しおん
 立花 夕海
 小笠原聖子
 西村 セイ
 萬年 和子
 くだうひろこ
 岩村多加雄

栗山 朗子 選

天位 夏来る子らに走るといふ遊び
 地位 己が影幾たび踏んで田植了ふ
 人位 五加摘む会津藩士の小さき墓
 秀逸 背き来し母亡き故郷花は葉に
 履歴書はもういらぬ歳心太
 幽霊の役あつさりと決まりけり
 ゆつたりと牛の反芻風光る
 もの言はぬことも美学ぞ蝸牛
 辛夷咲く学校が好き友が好き
 自由形次いで背泳ぎ鯉幟
 美しき産後の肥立ち衣更
 五月憂し音なく充つる採血管
 丹念に糠床返し今朝の夏
 袋掛雲の一つも寄せつけず
 虹立ちて兄弟げんか止んでをり
 漕ぐたびに軽くなりたる半仙戯
 連れあひは青い鳥かも豆の飯
 夏はじめパンケーキよく膨るるよ

三野宮照枝
 中村しおん
 岩村多加雄
 五十嵐かつ
 黒田 長子
 小野 寿子
 草野 力丸
 西川 無行
 飯田 知克
 小杉 郁子
 山本もとい
 土井 三乙
 榊 せい子
 千葉 禮子
 千葉 禮子
 清水 雪江
 くだうひろこ
 小川 澄子

小泉 静子 選

天位 花咲けど太き門大手門
 地位 学校へ行けぬ黄帽子葱坊主
 人位 どの牛も祖父の貌なり厩出し
 秀逸 己が影幾たび踏んで田植了ふ
 勝手口開けてけふより夏暖簾
 バス停に手書きの時刻山若葉
 蚕豆の三つ子五つ子福々し
 藤咲いて風に量感生まれたり
 朧の夜素知らぬ顔で嘘をつく
 しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ
 吾が子の名忘れし母と蓬餅
 密集は御法度なるぞチューリップ
 身につかぬ古稀の学びや緑さす
 無風日や骨の抜けたる鯉のぼり
 人の世は人に任せて花は葉に
 滝ひとつ過ぎて轟く次の滝
 軒下のサッカーシューズ梅雨に入る
 山背寒四角にねまる牛の群

杉山 畝女
 榊 せい子
 くだうひろこ
 中村しおん
 鈴木ゆき子
 小笠原聖子
 小林 五月
 清水 雪江
 飯田 知克
 蒲田 吟竜
 伊藤 芳博
 牧 ひろし
 三上 裕子
 雪田 樹理
 島田よう子
 佐藤 幸子
 今 祐治
 草野 力丸

郡川 宏一 選

天位 夏来る子らに走るといふ遊び
 地位 戦あるな長々つづく蟻の列
 人位 吾が子の名忘れし母と蓬餅
 秀逸 夏きざす白でまとめる卓上花
 更衣いろいろあつて九十九髪
 聖五月豚・牛・鶏に餌足しぬ
 サングラス女は女觀察す
 五加摘む会津藩士の小さき墓
 子の声の秘密基地めく木下闇
 透かし見る津軽びいどろ風五月
 十歳と交はすメールや雲の峰
 足場屋に積まるる足場夏つばめ
 生国の訛かくさず金魚売
 風呂沸いて烏賊釣り船の戻る家
 藤咲いて風に量感生まれたり
 花見酒じわりじわりと低気圧
 ゆつたりと牛の反芻風光る
 仔牛には広過ぎる空牧開き

三野宮照枝
 三ヶ森青雲
 伊藤 芳博
 江口 みよ
 小笠原八千代
 小野 寿子
 小野 寿子
 くだうひろこ
 岩村多加雄
 村田加寿子
 竹浪 幸子
 立花 夕海
 小笠原聖子
 高橋 千恵
 齋藤 君子
 清水 雪江
 柏崎 泰造
 草野 力丸
 吉田千嘉子

今 順子 選

天位 人の世は人に任せて花は葉に
地位 牧草のうねり大きく風五月
秀逸 更衣いろいろあつて九十九髪
田を打てばほこほこと土喜べり
小半を手酌に父の日も暮れる
どの木ともなく生まれたる初夏の風
撰社にも末社にも降る竹落葉
花冷や勝手気儘な人とゐて
しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ
普段着のままの付き合ひ黄水仙
透かし見る津軽びいどろ風五月
花りんご野を平らかに津軽富士
コーヒーに始まるひと日菜種梅雨
生国の訛かくさず金魚売
春雷を聞きつつ堆肥鋤き込みぬ
新緑の里山に目を勞れり
翠巒の映るみづうみ昼河鹿
五加摘む会津藩士の小さき墓

島田よう子
鈴木志美恵
小笠原八千代
榊 せい子
成田 政美
七戸富美子
小川 澄子
木村 秋湖
蒲田 吟竜
黒丸 久子
竹浪 幸子
小野寺和子
小杉 郁子
高橋 千恵
宮川 暢子
松宮 梗子
鈴木 莉花
岩村多加雄

斎藤ひでを 選

天位 放流の稚魚ひるがへる立夏かな
地位 万緑や指の先まで深呼吸
秀逸 トンネルを抜けて津軽路緑さす
轉に朝の光の弾かれし
透き通る少女の声や更衣
海に向くあぢさゐの青極まれり
稜線をまろやかにして鳥帰る
岬馬の胸を抜けゆく夏の蝶
古釘に父の帽子や遠郭公
休み田を充電のごとたんぽぽ黄
すでに斧振り翳しおり子蟻螂
樹木医の逝く日みどりの日となりし
羅漢像の背より迫る五月闇
花りんご帰郷のバスも香りけり
虹立ちて兄弟げんか止んでをり
花林檎息深く吸ふ家郷かな
ごちや混ぜの匂親しき夜宮かな
五加摘む会津藩士の小さき墓

くどうひろこ
下山 延子
田村 芳陽
馬場 裕子
成田 政美
千葉 禮子
西谷 是空
畑中とほる
牧 ひろし
佃 正子
加藤健一郎
雪田 樹理
栗山 朗子
中村 吉孝
千葉 禮子
宮川 暢子
葛西 栄子
岩村多加雄

佐々木雅翔 選

天位 しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ
地位 放流の稚魚ひるがへる立夏かな
秀逸 花屑を掬ひ命のしめりとも
己が影幾たび踏んで田植了ふ
戦あるな長々つづく蟻の列
陽炎へる鉄路に消えしラストラン
生国の訛かくさず金魚売
千枚田その一枚に田を植うる
コロナ禍や一億人の夏の安居
古釘に父の帽子や遠郭公
梵鐘を撞けば清しき初夏の風
裏山の闇せまりきて雨蛙
棟上げの木槌高らか青葉風
藤咲いて風に量感生まれたり
屋敷や風にあらがふひととと
翠巒の映るみづうみ昼河鹿
鼓笛隊のあとに夏蝶付いてきし
曳かれ行く牛に卵の花腐しかな

蒲田 吟竜
くどうひろこ
吉田千嘉子
中村しおん
三ヶ森青雲
蝦名 がこ
高橋 千恵
小林 五月
森内 勇治
牧 ひろし
金田 一子
外川 幸子
京谷 みき
清水 雪江
小野 いるま
鈴木 莉花
千葉 禮子
木村 幸子

鈴木志美恵 選

天位 また船に「乗る」と焼酎注ぎ足せり
地位 夏来る子らに走るといふ遊び
秀逸 仔牛には広過ぎる空牧開き
しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ
夏さざす白でまとめる卓上花
バス停に手書きの時刻山若葉
古家や蝦蟇と戸籍を共有す
もの言はぬことも美学ぞ蝸牛
水無月の沖に模糊たる蝦夷の山
灯台の鳥朝焼けのど真ん中
轉にこころの凝りのほぐれゆく
耕して老婆の日誌始まりぬ
薫風や正直に生き九十歳
いつまでも老いを隠してサングラス
つくしんぼ己が身の丈生きるのみ
老鶯や一声だけの存在感
岬馬の胸を抜けゆく夏の蝶
蚕豆の幸せさうな色・形

下河原 勝
三野宮照枝
吉田千嘉子
蒲田 吟竜
江口 みよ
小笠原聖子
木村あさ子
西川 無行
和田たかし
川口 巖溪
大川 恵子
雪田 一石
西村 セイ
田村 芳陽
榊 せい子
千葉 禮子
畑中とほる
西川 無行

高橋 千恵 選

天位 自由形次いで背泳ぎ鯉職
地位 己が影幾たび踏んで田植了ふ
秀逸 萬蒲湯や一病のなき身を浸し
万緑や指の先まで深呼吸
僧の漕ぐ自転車のかごカーネーション
笹舟のほどこけて海へ来てゐたり
どの牛も祖父の貌なり厩出し
撰社にも末社にも降る竹落葉
しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ
岩木嶺の靈気を秘めて水芭蕉
天逝の兄に供へる柏餅
耕して老婆の日誌始まりぬ
無風日や骨の抜けたる鯉のぼり
若葉雨濡れて清しき白馬かな
虹立ちて兄弟げんか止んでをり
惜春や校歌のひとつまた消えて
田水引く歓喜の音の沁みゆけり
どの木ともなく生まれたる初夏の風

小杉 郁子
中村しおん
佐々木雅翔
下山 延子
萬年 和子
日野口 晃
くどうひろこ
小川 澄子
蒲田 吟竜
桜庭 恵
大川 恵子
雪田 一石
雪田 樹理
高橋千夜湖
千葉 禮子
稲場 暁子
鈴木 莉花
七戸富美子

高橋千夜湖 選

天位 積まれたる石の鎮まる晩夏かな
地位 朴の花高しこぼれてより仰ぐ
秀逸 ぐいぐいと交差点行く黒日傘
仔牛には広過ぎる空牧開き
その次の風を選びて花吹雪
ひつそりと終へる葬儀や余花の雨
父が子に手を貸す春の逆上がり
風呂沸いて鳥賊釣り船の戻る家
走る息はづませてこそこの日
バス停に手書きの時刻山若葉
夏来る子らに走るといふ遊び
丹念に糠床返し今朝の夏
戦あるな長々つづく蟻の列
大の字の青春遠し夏の芝
いきいきと樹の芽水の音五月かな
遺されし色鉛筆や星涼し
花りんご野を平らかに津軽富士
無風日や骨の抜けたる鯉のぼり

今 順子
藤田 豊子
中澤 玲子
吉田千嘉子
野村 英利
加藤 孝子
浜田しげる
齋藤 君子
村田加寿子
小笠原聖子
三野宮照枝
榊 せい子
三ヶ森青雲
工藤 祐子
中島 五郎
西村 セイ
小野寺和子
雪田 樹理

対馬 迪女 選

天位 藤咲いて風に量感生まれたり
地位 仔牛には広過ぎる空牧開き
人位 撰社にも末社にも降る竹落葉
秀逸 岩木川滔々と縫ふ植田かな
ひつそりと終へる葬儀や余花の雨
夏来る子らに走るといふ遊び
バス停に手書きの時刻山若葉
袋掛雲の一つも寄せつけず
普段着のままの付き合ひ黄水仙
轉にこころの凝りのほぐれゆく
絵馬掛けにお礼の絵馬も風五月
透かし見る津軽びいどろ風五月
己が影幾たび踏んで田植了ふ
甲田嶺のよく見ゆる日や花辛夷
青空はけふも新品花林檎
賑やかな鳥語の中の草むしり
父のごとそその父のごと耕せり
自肅解けやうやう余花を訪ひにけり

清水 雪江
吉田千嘉子
小川 澄子
川口 巖溪
加藤 孝子
三野宮照枝
小笠原聖子
千葉 禮子
黒丸 久子
大川 恵子
斎藤ひでを
竹浪 幸子
中村しおん
小野寺和子
奥田 卓司
工藤 祐子
吉田千嘉子
岩村多加雄

土田 紫翠 選

天位 また船に「乗る」と焼酎注ぎ足せり
地位 履歴書はもういらぬ歳心太
人位 老いの身に文芸を得む桜桃忌
秀逸 耕して老婆の日誌始まりぬ
身につかぬ古稀の字びや緑さす
青空はけふも新品花林檎
幽霊の役あつさり決まりけり
連れあひは青い鳥かも豆の飯
定食はさつき打たれし岩魚かな
郭公や鎌研ぐ堰の水の高
夏きざす白でまとめる卓上花
よく通る教師の声の若葉風
草いきれ案内板の現在地
薫風や正直に生き九十歳
漕ぐたびに軽くなりたる半仙戯
距離おいて並ぶ習慣花は葉に
惜春や校歌のひとつまた消えて
仔牛には広過ぎる空牧開き

下河原 勝
黒田 長子
七戸富美子
雪田 一石
三上 裕子
奥田 卓司
小野 寿子
森内 勇治
和田たかし
江口 みよ
竹浪 幸子
工藤 邦子
西村 セイ
清水 雪江
畠山 容子
稲場 暁子
吉田千嘉子

西谷 是空 選

天位 朧の夜素知らぬ顔で嘘をつく
地位 胡沙荒るる「わさお」の小屋に猫二匹
人位 ひつそりと終へる葬儀や余花の雨
秀逸 夏めくや用件のみの白き箋
薫風や正直に生き九十歳
もの芽に万の声あり天を指す
津軽路の香をたつぷりと五月来る
ゆつたりと牛の反芻風光る
水無月の沖に模糊たる蝦夷の山
古釘に父の帽子と遠郭公
春眠やときに針とぶ蓄音機
肩寄せて母に添ふ窓月涼し
捨舟に投網の乾く若葉光
蟻もぐる樹齢百なる木肌かな
若葉雨濡れて清しき白馬かな
聖五月豚・牛・鶏に餌足しぬ
サンングラス女は女観察す
花冷や勝手気儘な人とあて

飯田 知克
南 美智子
加藤 孝子
笹原 郁子
西村 セイ
市川 明子
小野 力丸
草野 力丸
和田たかし
牧 ひろし
馬場 裕子
永倉 みつ
中村しおん
外川 幸子
高橋千夜湖
小野 寿子
くどうひろこ
木村 秋湖

野村 英利 選

天位 西日背にうしろ手に曳く猫車
地位 青葉木菟ふた声で突く森の闇
人位 山背寒四角にねまる牛の群
秀逸 雨の来る風の匂ひや夕薄暑
夏来る子らに走るといふ遊び
樹影みな池心に伸びて時鳥
袋掛雲の一つも寄せつけず
曳かれ行く牛に卵の花腐しかな
風光る昼の学校カレの香
己が影幾たび踏んで田植了ふ
バス停に手書きの時刻山若葉
樹木医の逝く日みどりの日となりし
棟上げの木槌高らか青葉風
僧の漕ぐ自転車のかごカーネーション
牧草のうねり大きく風五月
唇顔や風にあらがふひとところ
割箸の杉の香りや夏料理
花屑を掬ひ命のしめりとも

五十嵐かつ
畑中 月穂
草野 力丸
永倉 みつ
三野宮照枝
土井 三乙
千葉 禮子
木村 幸子
飯田 知克
中村しおん
小笠原聖子
雪田 樹理
京谷 みき
萬年 和子
鈴木志美恵
小野 礼子
千葉 禮子
吉田千嘉子

畑中とほる 選

天位 しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ
地位 古釘に父の帽子や遠郭公
人位 どの牛も祖父の貌なり厩出し
秀逸 卯波たつ岬は本州最北端
吾が子の名忘れし母と蓬餅
若葉風山詠みし句碑山を向き
アカシアの風よぶ花や夜の匂ひ
風呂沸いて鳥賊釣り船の戻る家
復活の蕪島神社海猫来たる
水無月の沖に模糊たる蝦夷の山
子の声の秘密基地めく木下闇
普段着のままの付き合ひ黄水仙
今日立夏校歌の山を正面に
街路樹は切株となり夏つばめ
惜春や校歌のひとつまた消えて
端居してふと口に出す子守唄
いか簾西海岸へ夕日落つ

蒲田 吟竜
牧 ひろし
くどうひろこ
岩田 秀夫
伊藤 芳博
斎藤ひでを
櫻田 英二
齋藤 君子
布施 協一
和田たかし
村田加寿子
黒丸 久子
橋本 惇子
相馬 禮子
稲場 暁子
小野 寿子
葛西 栄子
千葉 禮子

三ヶ森青雲 選

天位 五加摘む会津藩士の小さき墓
地位 藤咲いて風に量感生まれたり
人位 田に水を引きて母郷の貌生るる
秀逸 その次の風を選びて花吹雪
五月憂し音なく充つる採血管
棟上げの木槌高らか青葉風
滝ひとつ過ぎて轟く次の滝
リラ冷のチャペルに流る鎮魂歌
青葉木菟ふた声で突く森の闇
若葉風山詠みし句碑山を向き
腹いっぱい風呑み泳ぐこいのぼり
裏山の闇せまりきて雨蛙
若葉雨濡れて清しき白馬かな
大の字の青春遠し夏の芝
杉に棲み出るも戻るも青葉かな
軒下のサッカーシューズ梅雨に入る
割箸の杉の香りや夏料理
休み田を充電のごとたんばば黄

岩村多加雄
清水 雪江
島田よう子
野村 英利
土井 三乙
京谷 みき
佐藤 幸子
赤坂 良美
畑中 月穂
斎藤ひでを
中澤 草子
外川 幸子
高橋千夜湖
工藤 祐子
くどうひろこ
今 祐治
千葉 禮子
佃 正子

吉田千嘉子 選

天位 青空はけふも新品花林檎
地位 蚕豆の幸せさうな色・形
人位 万緑や指の先まで深呼吸
秀逸 己が影幾たび踏んで田植了ふ
夏来る子らに走るといふ遊び
生国の訛かくさず金魚売
小半を手酌に父の日も暮れる
賑やかな鳥語の中の草むしり
しきたりもしがらみも継ぎ畑を打つ
たんぼの絮に教はる風の道
牧草のうねり大きく風五月
夏霧やわが年輪のきしむ音
花林檎息深く吸ふ家郷かな
勝手口開けてけふより夏暖簾
サングラス女は女観察す
木から木へ鳥語たちまち鳥の恋
山背寒四角にねまる牛の群
自肅解けやうやう余花を訪ひにけり

奥田 卓司
西川 無行
下山 延子
中村しおん
三野宮照枝
高橋 千恵
成田 政美
工藤 祐子
蒲田 吟竜
蝦名 がこ
鈴木志美恵
小野いるま
宮川 暢子
鈴木ゆき子
くどうひろこ
浜田しげる
草野 力丸
岩村多加雄

吉田 敏夫 選

天位 街路樹は切株となり夏つばめ
地位 鼓笛隊のあとに夏蝶付いてきし
人位 生国の訛かくさず金魚売
秀逸 その次の風を選びて花吹雪
雨の来る風の匂ひや夕薄暑
いつまでも老いを隠してサングラス
履歴書はもういらぬ歳心太
サングラス女は女観察す
普段着のままの付き合ひ黄水仙
耕して老婆の日誌始まりぬ
揚ひばり空の階段のばりゆく
積まれたる石の鎮まる晩夏かな
羽抜鶏村に一人の郵便夫
白梅や思惟仏の背の水の音
賑やかな鳥語の中の草むしり
笹舟のほどけて海へ来てゐたり
父のごとそその父のごと耕せり
夏はじめパンケーキよく膨るるよ

相馬 禮子
千葉 禮子
高橋 千恵
野村 英利
永倉 みつ
田村 芳陽
黒田 長子
くどうひろこ
黒丸 久子
雪田 一石
小笠原聖子
今 順子
築館 秋水
三ヶ森青雲
工藤 祐子
日野口 晃
吉田千嘉子
小川 澄子

高田美津子さんが

七戸町文化功労賞

七戸町の2019年度文化功労賞に高田美津子さん(たかんな)が選ばれ、二月二十二日表彰式が行われた。高田さんは平成五年に七戸俳句会に入会、「たかんな」など俳句結社で活動する傍ら、町内の小学校で児童の指導に当たるなど、長年にわたり文化の普及と発展に尽力した功績が認められた。



高田美津子 さん



栗山朗子 さん



野村英利 さん

栗山朗子さんに

三戸町文化賞

三戸町の栗山朗子さん(青嶺)が2019年度の町文化賞を受賞。二月二十九日に表彰式が行われた。受賞理由は「俳句の分野において優れた評価を受けた」こと。栗山さんは俳人協会青森県支部の事務局長を務めたことや、幹事として俳句大会の選者などを務めている。

〈事務局から〉

支部会費を支部へ振り込んだ方の中で本人の名前ではなく「サカシゲル」で振り込んだ方がいます。振り込んだ日は五月一日で青森銀行根城支店からです。心当たりの人は事務局の浜田しげるまでご連絡ください。

編集後記

◇総会がコロナウイルス感染拡大防止のために中止となった。総会中止は支部結成以来三十八年、初めてである。併せて俳句大会も形を変え紙上俳句大会となった。総会の議案は会員全員に送付、混乱も無く承認を得ることができホッとした。また、紙上句会は昨年より百句多い三百七十六句だった。各大会が中止になっているからだろうか。それにしても、コロナ、終息を願うばかりだ。(S)

◇今生は未だ、新型コロナの支配下にあります。思い掛けないことでした。スキを突かれました。俳句界も例外ではありません。支部の総会・俳句大会や九月に予定していた東北俳句大会が急遽紙上開催に変更になりました。いつもとの違いに若干困惑しています。ただ、お陰で見えてきたものもあります。経験値として生かしたいものです。(亥)

野村英利さんは

おいらせ町顕彰

おいらせ町の元年度表彰授与式が三月一日行われ、野村英利さん(たかんな)が顕彰状を授与された。受賞理由は町政の振興発展に功績があったこと。野村さんは警察功労者として第三十二回危険業務者叙勲・瑞宝双光章を受章したことが称えられた。野村さんは支部の幹事で支部俳句大会などの選者を務めている。